マラリア研究が示す医学研究目標のゆがみ

山崎茂明
愛知淑徳大学文学部図書館情報学科

科学政策や研究目標の設定にあたり、研究動向を生産論文数から検討することは、有効な方法である。発表論文は、研究活動を反映しており、国や時代による違いや特徴が示されるだけでなく、これまでの研究目標の誤りやゆがみを明らかにしてくれる。1990 年代中頃に、アメリカだけでなく、EU や日本で、科学文献データベースを利用した発表論文数の大規模な調査がなされた。継続的に行われている全米科学財団の結果をみると、アメリカ、イギリスなどの先進国では、研究の中心が理工学から生命科学へシフトしており、ロシア・東欧などでは化学や物理学に力点がおかれ、医学に代表される生命科学は弱いままである。アジアなどの発展途上国では、国作りの基盤を支える工学領域が中心になっている。また、国民の科学政策への要望は、先進国では医療や教育、そして老齢化問題などに関心が向いている。しかし、各国の利害を超えたグローバルな視点や、政治経済力の弱い国で生活している人々の要望は、先進国における科学研究政策に反映され難い。研究活動の目標を、市場主義の論理で対処すれば、グローバルな視点や開発途上国のニーズは無視されることになる。特に、貧困な発展途上国の感染症を中心とした疾患の製薬開発は取り残されるだろう。そのような無視（ネグレクト）された疾患の代表としてマラリアをあげることができる。

日本のマラリア研究の現状をとらえるために、マラリアに関する世界の発表論文数変化と日本からの発表数を、PubMed/Medline を利用して調査した。対象時期は、1981 年から 2005 年とした。この 25 年間で、1983 年に日本からのマラリア文献が検索されたが、1995 年以前は一桁でしかない。その後、2003 年の 29 件を最高にしているが、1981 年から 2005 年に占める日本のマラリア文献は、わずか 1.4 パーセント（258/19668）である。日本の医学研究の主題的な特徴を、巨視的にとらえるために、Medline が採用している MeSH カテゴリーを使用して、主要カテゴリーごとの日本文献シェアを調べた。これによると、薬剤研究のシェアが高く、基礎と臨床という視点で見ると、基礎研究発表が多く、臨床医学での寄与が低くい。また、精神疾患や公衆衛生学的な寄与が、低いという特徴が見られた。さらに、感染症医学領域での研究の低調さを明らかにするために、主要疾患に占める日本文献シェアを検索した。癌、消化器病学、循環器疾患に高いシェアを示し、主要な感染症であるヒト・鳥インフルエンザ感染症で 2.5 パーセント、マラリアでは 1 パーセント、エイズでは 0.5 パーセントとなっていた。薬剤研究は経済発展の基盤になる研究であり、熱心に取り組まれているが、感染症研究は過去の研究領域として看過されており、日本の医学研究の傾向は、国際的な視点を欠いたものといえるだろう。